歌の周辺

この歌はルビを付けなかったが、読み方を新仮名づかいで表記すると「あめひとよ／ふりたらいけり／みずべりの／えだにあかるむ／おおかたつむり」となる。使った言葉は、全て大和言葉である。

一晩ずっと雨が降って木々も空気もたっぷり潤った朝、木の枝に大きなカタツムリがいた。じゅうぶんな水分を恵まれたカタツムリは生命力を増してゆったり息づいているように見えた。そんな印象を「あかるむ」という言葉で表わしてみた。いわば主情的な一首である。

（高野公彦）

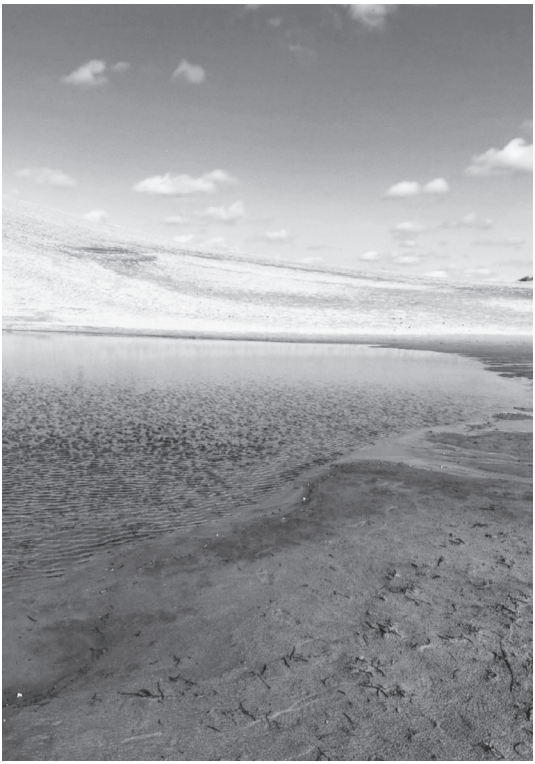
（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・27

雨一夜ふり足らひけり水辺の枝にあかるむ大かたつむり

――『淡青』

【鑑賞】生命の源である水が無数の雨粒となって一夜たっぷりと降った。「足らひけり」と天の恵みを喜ぶ作者は、水辺に息づく虫の存在に気づいた。潤いなしでは生きられないかたつむり。雨を求め、水滴をまとって枝にいた。普段は目立たない姿を「あかるむ」とクローズアップし、「大かたつむり」と結ぶ表現は絵画的。同じ生命体として、作者と対象の親近感も込められている。（薄葉　茂）



ふるさとコレクション――198

**鳥取砂丘オアシス**（鳥取県鳥取市）

鳥取平野より90メートルの高さに砂丘は横たわっている。県東部を流れる千代川（せんだいがわ）によって日本海へ運ばれた砂が潮流や波浪の力で海岸に打ち上げられ，砂丘列（砂の高まり）を形成したのが鳥取砂丘である。北西からの強風を受け止めるように広がる砂丘列の中，斜度32度の急斜面「馬の背」の頂上に登り海風に吹かれて日本海を臨むのは爽快だ。その馬の背の南麓に年数回現れるのが砂丘オアシスである。海岸から100メートルほど内陸の地下で滲み出た地下水が，姶良，阿蘇，三瓶，大山などの太古の火山活動の堆積地層に保たれ，地表面に湧出して窪地に留まる。海から近いにも拘らず真水で，江戸時代の古地図にも描かれ学術的調査も繰り返されている。真夏には消え，長雨後や降雪後に現れる。近年ではカエルもいるらしい。

砂丘が雪に覆われた日に，凍ったオアシスの傍でぱんと手を打つ。するとその澄んだ音がオアシスの上を走る。それは耳が喜ぶ極上の音なのである。

（写真・解説：川村　りら）